

ひて、厄拂ふ者にとらするものとして、をのがさまくする事なるに、むかしは膝のあたりかい探りても、其數を得たりしが、今は八疊のト間にもあまるばかりに成にたるぞ、侘しきや、厄拂ふ男の宵は町々をめぐりし後、夜更るほど聲呼からして、此わたりへも音なふ事にぞ有ける、行年波のしげく打よせて、かたち見にくう心かたくなに、今は世にいとほる、身の老はそとへと打出されざるこそせめての幸なれ、一えだの梅はそへずや、柊うり 雪はらふ垣ねや梅の厄おとし 梅やさく福と鬼とのへだて垣

〔守貞漫稿 二十七〕節分ノ夜、大坂ノ市民五六夫、或ハ同製ノ服ヲ着シ、或ハ不同ノ服モ有之、其中一人生海鼠ニ細繩ヲツケ、地上ヲ曳キ巡ル、其餘三四夫ハ各銅鑼、鉦、太鼓等ヲ鳴シテ曰、ウゴロモチハ内ニカ、トラゴドンノオンマヒジヤト呼ビ、自家及ビ知音ノ家ニモ往テ祝スコトアリ、ウゴロモチハ土龍ヲ云也、江戸ニテハ、ムグロモチト云、坂人今夜ノミ生海鼠ヲトラゴドノ、虎子殿ト云、傳云、行之年ハ、其家土龍地ヲ動サズ云々、最モ古風ヲ存セリ、

〔筆のすさび^三〕一節分に菓木をうつ事 五島の俗、節分に童子きそひて菓木をうちた、き、來年は枝のたわむまでなれ、といふ、蜡後草木をむちうち萌動せしむといふこと、おもひあはせておもしろし、

〔房總志料^四總附錄〕一夷隅郡夷北村の俗に、清明の候に童部あつまり、木刀竹鎗などいふもの持て、鬼の面を装るわらはを先にし、金鼓を鳴し、跡より逐、いふ惡鬼を退治すと、これ則追儼^{オミヤライ}の古俗、僻邑には猶かゝる事ぞのこれる、

歳暮